

各学習グループにおいて、グループに属する生徒の特徴を踏まえて「生きる力の五要素」の観点から「作業学習が何をねらった授業なのか」ということを明らかにし、一覧にすることで、高等部の作業学習との違いや学習グループ間のねらいの整合性を検討した。

このように、各学習グループのねらいを焦点化させるプロセスを通して、中学部の作業学習において「育てたい力」や各学習グループの授業のコンセプトを明確化することができ、教師間においても、そのコンセプトを共有することができた（図 10 参照）。

1 学期において、「育てたい力」や授業のコンセプトを明確化した後、事例対象とした C グループ（エコ活動班：知的代替 2 名・自立活動を主 11 名）では、2 学期に図 11 に示すように「個と集団のねらいをすり合わせる」手続きを通して、ねらいをより具体化させた。その際に、グループに属する生徒の発達水準が「感覚と運動の高次化」の第 I 層（初期感覚の世界）と合致すると判断できた。そこで、個々のねらいや本単位における学習活動を「発達系統表」の第 I 層に示された特徴に照らすことで、ねらいの妥当性を高めるようにした。

このような手続きを経ることにより、「発達を踏まえた根拠のあるねらい」とすることを目指した。また、校内における研究授業においては、個別シート（図 12 参照）を作成した。「個別シート」には、学習グループに属する生徒一人一人の個別の指導計画の年間目標や日常生活の指導・自立活動などの作業学習に関連する目標、単元や本時の個人目標、学習活動、配慮や手立てを記載した。この「個別のシート」を作成する際に、見直したねらいを参照しながら、生徒の単元や本時の目標を設定するようにした。

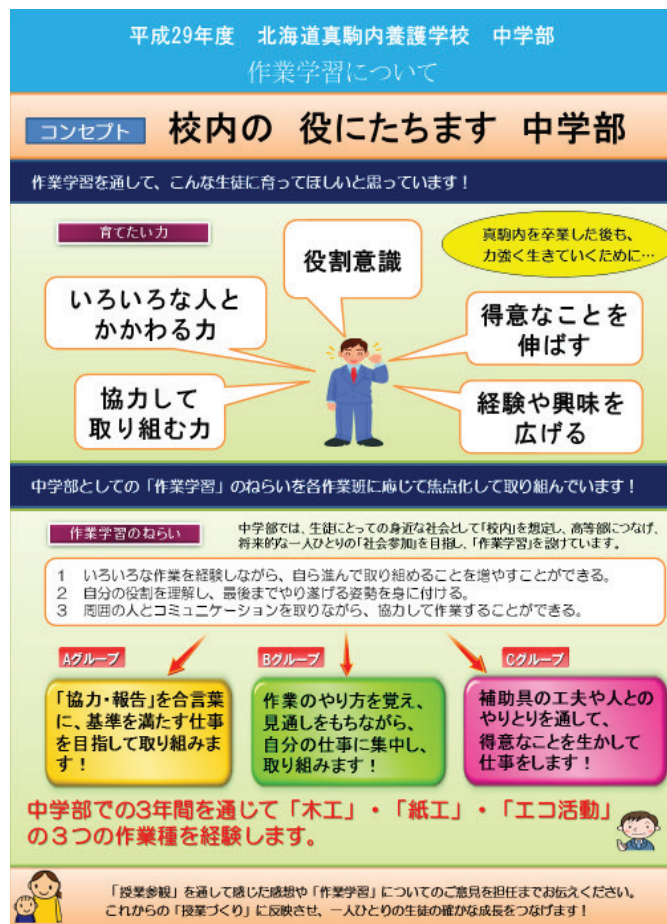


図 10 授業のコンセプトシート(保護者向けに配布)

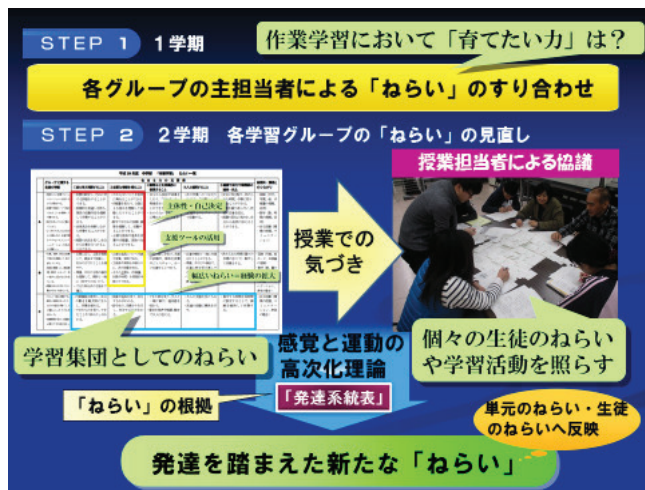


図 11 授業づくりを通した「ねらい」の見直し

後期 個別の指導計画	単元・本時の個人目標	学習の流れ(個別プログラム)	配慮・手立て/補助具の工夫
【年間目標】 ・移動手段や機器操作等、スイッチを使用して活動することができる。 【作業学習】 ・関わりが少ない教師とでも出席確認をすることができる。 ・自分のするべきことが分かり、少ない支援でけん引機を使ってゴミ捨ての作業をすることができる。 【自立活動】 ・けん引機を活用し、目的の場所まで移動したり、決まりを守って取り組むことができる。 【日生】 ・場面に応じて、あいさつや役割を果たすことができる。	【単元の目標】 目標① ・教師の指示を受け、ペットボトル置き場とゴミ捨て場でスムーズに止まり、ゴミ捨ての活動に取り組むことができる。 目標② ・音波関りの少ない教師や他学年の生徒の前でも声を出して挨拶や、やり取りをすることができる。 目標③ ・作業を繰り返すことにより、見る力や手指機能を向上させる。 【本時の目標】 目標① ・けん引機やストップカードの指示により、棒スイッチから手を離すことができる。 目標② ・同じ活動に取り組む生徒を意識して、自ら進んで、ラベルはがしの活動に取り組むことができる。 目標③ ・ラベルはがしで、次のペットボトルに移る際、「次はいいですわい」という教師の問いかけに対し、声を出して返事をすることができる。	1 始めの挨拶で、MTと一緒に集団の前で発声する。 2 出席確認でMTからネームカードを受け取り、その友達の名前を見る。 3 実物の2名指で、自分の担当の仕事を選んで、写真カードで今日の目標を選ぶ。 4 机の上のペットボトルを、腕で引き寄せて、自分の手にのせる。 5 けん引機でゴミ捨て場まで自走する。途中、教師の言葉かけやストップカードの指示で指示に従う。 6 自分で手を動かして色々な形状のスイッチを操作しペットボトルのラベルをはがしする。 7 次の作業に移る際、アイコンタクトや表情、スイッチ、発声で伝える。 8 振り返りで、O×カードの選択で自己評価をする。 9 終わりの挨拶で声を出す。	【個別の配慮・手立て】 ・各スイッチは、視認してから押すことができるように距離を調整する。 ・ゴミ捨ての活動では、事前に止まるべき場所を伝え、スイッチから手を離すことができた場合には、賞賛するようにする。 【補助具の工夫】 ・カード型は、つかみやすいように厚みを持たせるようにする。 ・けん引機のスイッチは、走行中でも押しやすいように棒スイッチを用いる。

図 12 個別シート(作成例)